

さんかくBook

Vol.2

2018/SPRING

旧「しのびあ」を
2017 創刊号として
「さんかくBook」へ
リニューアルしました。

特集

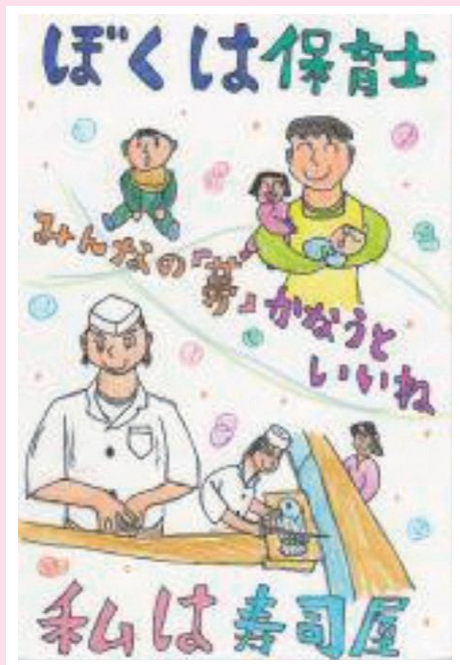
女性が活躍できる社会を目指して
～私がいま、伝えたいこと～国谷裕子氏

取材

男女ともに輝く活動 福島東高応援団／福島学院大学 YOSAKOI クラブ



小学校下学年の部 最優秀賞
清明小学校 3年 荒川 大悟 さん



小学校上学年の部 最優秀賞
福島第三小学校 6年 遠藤 萌花 さん



中学生の部 最優秀賞
西信中学校 3年 阿部 木香 さん

【表紙紹介】男女共同参画についての「あなたからのメッセージ」事業

この事業は、学校教育など教育活動のあらゆる場面で男女共同参画を推進する事業として実施しています。
今年度は「男だから、女だからといったワクにとらわれずに、学校や家庭、地域、職場で活躍するひと、活躍するすがた」をテーマに、小学生以上のみなさまから624点の応募をいただきました。最優秀賞に輝いた三つの作品をご紹介します。

特集

市制施行110周年記念事業

福島市男女共生セミナー2017

女性が活躍できる社会を目指して

「私がいま、伝えたいこと」

国谷 裕子氏

2017年11月25日に「福島市男女共生セミナー」として、国谷裕子さんに「女性が活躍できる社会を目指して」私がいま、伝えたいこと」をテーマに講演いただきました。国谷さんの経験や学んだことをもとに、女性を取り巻く環境や課題と今後の展望をお伝えします。

「黄金の3割」とは

はじめに「黄金の3割」という言葉をご紹介します。「黄金の3割」とは、たとえ少数派であっても、その割合が3割を超すと意思決定に影響を及ぼすことができる数字を表します。それを基に、国は女性管理職登用率の目標を30%に設定しています。

内閣府女性参画マップ2017によると、女性管理職比率は日本全体で13.5%、福島県は12%、福島市は16.5%であり、目標達成は困難な状況です。性別役割分担意識が高い地域ほど、大学を卒業した女性は帰ってきません。「ここに帰ってくれば、活躍できるチャンスがある、結婚・育児と仕事を両立することができる、キャリア形成もできる」ことが見えない限り、女性が帰ってくる確率は

低下してしまうのです。

私の経験「キャスターの仕事へ

私は、NHKのBS放送でのキャスターを半年間経験した後、総合テレビ21時台の国際担当キャスターの仕事につきました。経験が浅い私は緊張のあまり言葉につまり、質問にもパツと答えられない姿は視聴者にも伝わり半年で降板、その後務めたりポーターも半年で降板となり、人生で初めて大変な挫折感を味わいました。キャスターという仕事が終わっていないかったですね。

ありがたいことに、BS放送が本格稼働した1989年に再度キャスターの仕事をお願いいただき、4年後の1993年に「クローズアップ現代」の仕事をお願いしました。ベルリンの壁やソ連の崩壊、日本では2年連続の地価下落という本場の意味でのバブル崩壊や銀行破たん、リストラの開始という激動の時代にキャスターをさせていただき、たくさんの経験を積むことができました。この頃、私はとにかく認められたかったので、男性が男性社会で働くようにどんな労働環境でもN

のです。企業は意識的に女性をチャレンジングなポジションに配置するなど、女性のモチベーションを上げる取組みが求められています。

女性が活躍するために、その先にある社会

日本でも、ようやく自治体や企業のトップが女性活躍の必要性に気付き推進しています。しかし、家庭を顧みずに働いてきた中間管理職にはその意識が浸透せず、組織の隅々まで浸透していません。その方々は「粘土層」と呼ばれています。上から水を流しても、下まで浸透していきません。

出産・育児から復帰した女性が肩身の狭い思いをしています。時短勤務として復帰しても、仕事も育児も家事も中途半端で、自己肯定感がありません。「会社は何も貢献できていない」と涙し、自分を責める女性をたくさん見ました。自分を責める女性をこれ以上つくってはいけない、そのために、上司はきちんと女性の声に耳を傾けてほしい、女性も声をあげてほしいのです。ある企業が夕方から夜にかけて会議を設定していました。女性は保育所に子どもを迎えに行かなければならず、思いきって会議の時間を早めることを上司に提案したところ、あっさり認められ、男性社員にも喜ばれる結果になりました。

日本では、育休制度など、結婚後に子どもを育てながら働く制度の充実が進んできました。しかし、男女平等の意識改革が進まなかったため、女性が働くことが当たり前になっても、それが働く意欲



当日は430人の方にお話しいただきました

国谷 裕子（くにや ひろこ）

●プロフィール
大阪府生まれ。79年、米のブラウン大学卒業。81年、NHKア時のニュース英語放送の翻訳アナウンスを担当。89年、NHK衛星放送「ワールドニュース」キャスター。93年から2016年3月までNHKクローズアップ現代のキャスターを担当。1998年放送ウーマン賞、02年菊池寛賞、11年日本記者クラブ賞、16年キャリアフォーラム特別賞受賞。著書「キャスターという仕事」（全成新書）

の継続につながらず、未婚率が増加したように結婚や出産との両立にもつながりません。女性の働き方・働き方・働き方の活躍のさせ方に、ひずみがあるのです。これからは大量生産・大量消費の時代ではなく変わります。AIが普及し、仕事が多様化する時代に、持続可能な地域をつくらなければならない時代です。こうした時代に、男性中心の社会では対応しにくいことができません。男性だけではなく、女性、LGBT、障がい者がコラボレーションする社会が求められています。その大切なことの一つとして、仕事と家庭の両立支援と意識改革を両輪で進めることを職場できちんと話し合い、女性がキャリア形成を実感できる働き方・働き方を考えていきたいと思います。女性の能力が花開けば、いろいろなアイデアが地域の中に生まれ、「福島市にあれば女性が活躍できる」と思ってもらえるまじの魅力につながっていくと思います。

〇と言わず、言われるがままに働いていました。女性から見れば、あんな働き方はできない・したくないという、悪いロールモデルであったと思います。

クローズアップ現代と8年前の気づき

8年前に、世界で活躍する女性が集まる会議が開催されました。その中で、女性が活躍している会社が今の時代に売れる商品開発ができる」「女性が活躍している会社が伸びている」と活発な議論が交わされており、まさに目からうろこが落ちた瞬間でした。同時に、なぜ自分は今まで気付かなかったのか戸惑いました。

答えは簡単でした。「クローズアップ現代」の番組制作スタッフに女性はいま女性がいないからです。「黄金の3割」に遠く満たなかったのです。そのため、雇用問題を取り上げても内容は男性や若者が中心で、女性が直面している雇用問題にきちんと向き合ってきたか戸惑いました。私は女性ダイレクターやプロデューサーと連携して企画を進め、女性を取り巻く環境や働くことに関する問題を取り上げるようになりまし



女性の働く環境と意識

ここでいくつかのデータをもとに、女性の働く環境や意識についてお伝えします。日本女子大学のアンケート調査によると、「卒業時に働く意欲が高い人ほど離職率が高い」という結果が出ています。理由は、女性が男性と同等の仕事が与えられていないこと、女性の上司が少なく、ロールモデルがいらないことです。結婚・出産と仕事の両立を図る以前に、女性の人材育成が図られず、仕事内容自体に問題があるのです。これは別の調査ですが、退職する女性のうち、仕事の不満を理由とする方が実に63%もいるのです。

また、アメリカの大学の調査によると、上司からの指示は女性に対しては曖昧で、男性に対しては、きめ細かいという結果が出ています。リーダーの定義に、「人を引っ張ること」がありますが、女性が得意とするチームワークでの協調性は、リーダーとして認められにくくなっています。その結果として、人事担当から女性が評価されにくく、例えば企業が管理職のポストを考えると、職歴や判断力の点でふさわしい女性がいないと判断してしまう状況を生み出しているのです。一方で、女性側にも課題があります。フェイスブックCOOのシェリル・サンドバーグ氏は「プロジェクトを担当したい人」に手を挙げる女性が少ない。「会議で前に座る女性が少ない」と話しています。じゃばりだと思われたくない、嫌われたくない、そんな女性の心理が働いているのです。アメリカでさえそう

福島学院大学YOSAKOIクラブ「月下舞流」 ～男女共生セミナー2017のオープニングを飾った「月下舞流」の皆さんを取材しました～

取材日時：平成29年11月25日(土)10時00分～
場所：福島テルサ 楽屋3（地下1階）

質問1 クラブの紹介と結成理由を教えてください

元気、勇気、やる気、本気、笑顔をモットーに20名(女性18名、男性2名)で活動しています。ソーラン節が基本で、民謡も取り入れています。北海道出身の初代代表の「ヨサコイをやりたい!」という熱意で結成され、今年で15年目になります。

質問2 音楽に合わせて踊るまでにどの位、時間がかかりますか大勢で踊る時のチームワークの取り方はどうしていますか

5分間の演舞を覚えるために3週間はかかります。曲、振り付け、衣装全て自分たちで企画するので大変ですが、日頃からのコミュニケーションの賜物で、年齢性別に関係なく仲良くできていることがチームワークにつながっています。

質問3 YOSAKOIの魅力と活動で得られたことはどんなところを一番アピールしたいですか

体全体で表現することと、他チームとの交流で人間関係が広がることです。人数は少ないですが、精一杯、福島から元気を発信していきたいと考えています。

質問4 男女の役割分担はどのようになっていますか重要な役割に女性の登用はありますか

特に男女の区別はありませんが、重い荷物を運ぶ時などは男性が積極的に担っています。代表は女性が担い、2年生が主に活動、上級生は下支えに回っています。

質問5 男女共同参画をどう思いますか社会に出たら男女共同参画にどう携わっていきますか

男性、女性ではなく「社会人」として生きていきたいと考えています。子育てや、性別が偏っている職種でも、異性が取り組みやすい、働きやすい環境をつくっていくことが大切だと思います。

質問6 女性の社会進出が進まないことについてどのように考えますか

待機児童の問題と、キャリア形成の男女差が原因だと思います。夫婦対等に子育てをし、育児休暇を取得できるような職場環境が大切だと思います。

質問7 YOSAKOI 活動の活かし方と今後の抱負

男女混合チームなので、男女それぞれの良さを活かし、コミュニケーションを大切にレベルアップしていきたいです。



福島県立福島東高等学校「東高応援団」

～女性団長が活躍している東高応援団取材しました～

取材日時：平成29年10月24日(火)16:00～
場 所：福島県立福島東高等学校

福島東高等学校3年 柴田 南さん(第35代団長)
福島東高等学校2年 遠藤 榛人さん(第36代団長)



柴田南さん(前列左から2人目)、遠藤榛人さん(後列右側)

質問1 応援団に加入するきっかけと応援団長になった理由を教えてください

(柴田さん) 東高野球部の兄を中学時代から応援にいつており、女性応援団員の姿を見ていました。高校入学後、野球に関連する部活をしたいと思い、応援団に入り、先輩の指名を受けて団長になりました。
(遠藤さん) 中学生のとき野球部に所属していましたが、ベンチ入りはできませんでしたが、応援を一生懸命やることにやりがいを感じていました。

質問2 団長になったときの変化と今後の課題を教えてください

団員のときは自由でしたが、団長になって責任の重さを感じました。部員を引っ張っていく立場として、団員と話をしていました。課題は試合の流れにあった応援をすること。

臨機応変な対応が大切で、何かあったときは試合後のミーティングで解決しています。

質問3 男性の印象が強い応援団、実際に入ってみていかがでしたか

入学したとき、上級生に女性部員がいたため入りやすかったです。練習は中庭と体育館で行っていて、団長として怒鳴ったり大声を出したりすることが多いため、怖がられていました。

質問4 女性ということを楽しかったこと、苦労されたことはありますか

応援団は男性というイメージが残っていますが、女性がやると「かっこいい」というイメージになり、学ラン姿で応援すると周りからの反応があつて、嬉しかったです。
重い荷物を運ぶことは大変でした。また、野球以外の競技では応援の形式が異なり苦労しました。

質問5 家族の反応はどうでしたか

中学時代にソフトボールをやっていたこともあり、応援団ではなく野球部のマネージャーではないのかと初めは反対されましたが、今では家族も応援に来てくれるようになりました。

質問6 どんな思いを込めて応援しているのですか

試合に勝ってほしいと願って応援しています。応援席にはベンチ入りできなかったメンバーや保護者がいます。

るので、盛り上がるよう「楽しい応援」ができるよう努力しました。

質問7 「男女共同参画」をどう捉えていますか

お互いに助け合いながら、それぞれができることをするのが大切。例えば文化祭で男子からいろんな案が出たとき、まとめ役になるのは女子です。男女助け合いながら文化祭を成功に導いています。

質問8 社会に出たら、男女共同参画に携わっていききたいですか

女性の歴史を学びたいです。歴史で活躍する人物は男性ばかりですが、歴史の中で女性の待遇を含め女性活躍にどんな変化があつたかを勉強したいと思っています。

質問9 応援団活動の今後の活かし方と今後の抱負を教えてください

(柴田さん) 度胸がつき、緊張する中でもしつかりと成果を出すことができるようになりました。「常にチャレンジ」をして、福島に戻って活躍したいです。
(遠藤さん) 団長を引き継ぎ、責任を感じています。目の前の試合を全力で応援していきたいです。



【取材を終えて】

柴田さんが女性応援団長として、試行錯誤しながら団員を引っ張っていく様子が目に浮かぶようでした。
男子・女子の力を合わせた東高応援団の今後の活躍がとても楽しみです。



東高応援団や学院大YOSAKOIクラブの取材をとおして、男女意識することなくお互いの良さを認め合い、自然体で接している姿に感銘を受けました。男女差は、大人がつくり出しているものですね。若者の姿を見て将来が楽しみになると同時に、私たち大人が男女ともに活躍できる関係や意識をつくっていくかなければならないと、改めて感じました。

編集

さんかくBOOK編集委員会
【市民編集委員(8名)】

- 浅野真也 小熊剛
 - 加藤憲彦 佐藤あけみ
 - 清野篤志 西條正美
 - 三上多恵子 吉田美穂
- ※さんかくBOOKは、市政だより折り込みのほか、各学習センターなど市の窓口配置しています。また、ホームページからもご覧いただけます。



福島市男女共同参画センター
ウィズ・もとまち

発行 福島市総務部男女共同参画センター
〒960-8035 福島市本町2番6号 Tel 024-525-3784 Fax 024-522-1528
ホームページ <http://www.city.fukushima.fukushima.jp/>

